

漫画『馬田行啓と小野光洋』

—教育に情熱を燃やした文教大学学園の創立者たち

第2章「もう一人の創立者・小野光洋

変革へのパワフルな実行力」解説

一 大正という時代と青年 小野光洋

小野光洋は、一八九八（明治三一）年に山梨県東八代郡富士見村東油川（現・笛吹市）に小野日祥の長男として誕生した。幼名は法。父・日祥は、日蓮宗寺院の住職を務める人物であった（甲府興信所編『山梨人事興信録』第三輯、甲府興信所、一九四〇年、三三六～三三七ページ）。

一九一八（大正七）年に山梨県立甲府中学校（現・山梨県立甲府第一高等学校）を卒業した。その後、日蓮宗大学（現・立正大学）補習科に入学し、一九二四（大正一三）年に日蓮宗大学本科を卒業している（漫画本編二五ページ）。翌二五（大正一四）年には、小野は立正大学文学部哲学科に再入学し、一九二八（昭和三）年に卒業した。



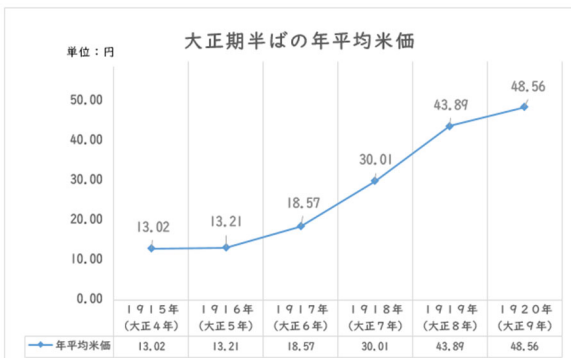
小野が日蓮宗大学に入学した時期は、一九一〇年代後半である。この時期は、大正デモクラシーに象徴されるように大衆運動が高揚し、政治や経済のみならず、生活面においても大きな転換点であった。

後述する日蓮宗大学社会問題研究会の結成との関連で言えば、第一次世界大戦期の日本においては、一九一五（大正四）年半ば以降に大正バブルを迎えた（漫画本編一六ページ）。

日本は、ヨーロッパ各国が戦争の遂行により対アジア貿易から後退し、その時機を捉えアジアへの輸出を加速させた。さらには連合国から軍需品の注文が殺到し、それに関連する海運業や造船業が活況を呈し、これまでに経験したことがない好景気となった。急激に富裕化した「成金」が誕生したのも、まさにこの時期であった。もとは将棋の用語であり、歩が敵陣に入ると金となることから、この時期に富を蓄えた人々が「成金」と呼ばれていた。

その一方で、物価全般は連続的に上昇し、とりわけ生活必需品である米穀が影響を受け、人々の生活は危機に瀕した。一九一〇年代後半における一石あたりの年平均米価をみると、一九一七（大正六）年は一八円五七銭、一八年には三〇円一銭、一九年には四三円八九銭と断続的に上昇している（農林省農務局『米穀要覧』一九三〇年、一七ページ、なおグラフも同書より作成）。

なお、米穀の単位は石であり、容量では約一八〇リットル、重量では一四〇～一五〇キログラムと換算できる。当時の一円は現在の貨幣価値で二七九〇円となり、一九二〇（大正九）年の年平均米価が四八円五六銭であることから、約一三万五四〇〇円に相当する。より身近な単位に置き換えて考えてみると、スーパーなどにおいて米穀は一〇キログラムで販売されているため、一〇キログラムで約九〇〇〇円となる。比較として、二〇二三（令和五）年度の玄米価格が約二五五〇円であり、単純な比較は難しい



が、米価が三・五倍となった感覚である。

そこで、一九一八（大正七）年七月、富山県の漁村において物価騰貴に危機感を覚えた漁師の主婦が集会を開き、米穀の廉売を唱えた。これが米騒動の発端と言われ、翌月以降には西日本を中心に波及した（漫画本編二六ページ）。

つまり、好景気によるインフレ、すなわち物価高騰が、人々の生活に影響を及ぼし、次第に社会運動が高揚していくのである。経済発展と表裏一体をなす社会の矛盾を、同

時代に生きた小野が肌で感じ取り、社会問題への関心を高め、その実践として日蓮宗大学社会問題研究会に参加を決めるのであった。

（図一）米騒動の発生と伝播、（図二）八月一二日の岡山での米騒動

『朝日クロニクル週刊20世紀 日本人の100年』五七 一九一八—一九、二〇〇〇年三月一二日、八ページ

図 1

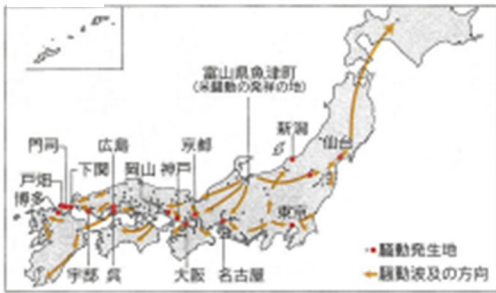
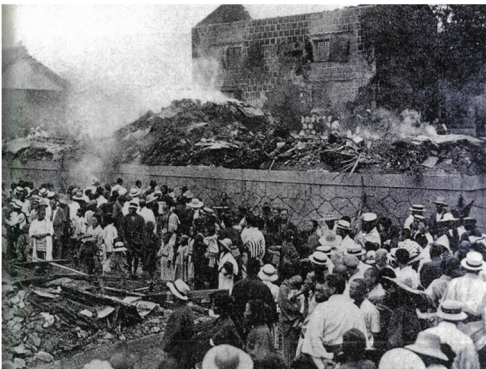


図 2



二 小野光洋と日蓮宗大学

日蓮宗大学に入学した小野は、東京での学生生活を満喫したのである。片山日幹は、回想録「日蓮宗大学時代の思い出」において、小野とのエピソードを次のように記している。

小野光洋氏は甲府かどこか山梨県の中学を、私は丹波兵庫県立柏原中学を卒えて、大正八年四月共に補習科へ入学した甲州、丹波きつすい「生粋」の山猿で、当時の出立たるや、手織りの木綿の着物に、色あせた木綿の紋附羽織に、小倉の袴、ほうばの高下駄、共に見おとりしい山武者であった」

小野光洋先生追憶誌編集委員会編『小野光洋先生 私学人としての足跡』学校法人立正学園、一九七一年、一七五ページ。

資料では、「山猿」「山武者」という言葉ばかりが目につき、いささか無骨な男をイメージさせるが、詳細は第三章に描かれているように、熱い志を持つ人物であった。文中にある「小倉の袴」は、「小倉袴」のことであり、小倉織で仕立てた袴である。「ほうばの高下駄」とは、「朴齒下駄」のことであり、齒を朴の木で作った下駄のことである。

小倉袴を着用したシーンは夏目漱石の小説『彼岸過迄』にも描かれ、そのほか、森鷗外作品にも登場しており、当時の学生が着用していた一般的な袴であった。小倉袴のほかに、羽織、学生帽、紺足袋、朴齒下駄などは、学生の服装の定番アイテムであったと言える。



図 3 小倉袴



図 4 朴齒下駄

(図3) 大丸弘・高橋晴子『新聞連載小説の挿絵でみる近代日本の身装文化』三元社、二〇一九年、三七七～三七八ページ

(図4) 難波知子『近代日本学校制服図録』創元社、二〇一六年、三三ページ

ところで、小野は、日蓮宗大学社会問題研究会に所属することとなるが、同研究会の設立経緯は次のように説明されている(不二出版『戦前期 仏教社会事業資料集成』第一巻 諸宗派編一、二〇一三年、解題三～四ページ)。

一九一七(大正六)年九月末、関東地方を暴風雨が襲い多数の罹災者を出した。死者・行方不明者が約一三〇〇人、倒壊・流出家屋約四五〇〇〇戸という甚大な被害が生じ、そのほか農作物にも被害が出て食糧品の価格が大暴騰した。罹災者の救済活動に参加していた日蓮宗大学本科三年の学生が「社会問題研究の必要」(『大崎学報』学生号・一九一八年五月)を発表した(漫画本編二七ページ)。

これ以降、学内に社会問題を論じる研究会を結成する機運が高まり、一九一九(大正八)年二月に日蓮宗大学社会問題研究会が、大学により正式に認可されたのである。なお、同研究会の設立時期については不明な点が多いが、一九二八(昭和三)年に社会問題研究会が一〇周年を迎えることから、創立は一九一八(大正七)年と推測される。



三 馬田と小野の邂逅

立正学園(現在の文教大学学園)の創立者である馬田と小野の出会い、立正大学時代にさかのぼる。

大学の昇格については第一章の解説文でも言及しているが、馬田は、一九一九(大正八)年に日蓮宗大学社会問題研究会の会長に就任している。同時に、馬田は専門学校から大学に昇格のため文部省に陳情書を提出している。大学昇格の重要な契機となったのは、一九一八(大正七)年に制定された「大学令」(勅令第三八八号)であった。

第一条

大学ハ国家ニ須要ナル學術ノ理論及応用ヲ教授シ、並其ノ
蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ、兼テ人格ノ陶冶及国家思
想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス

蘊奥…学問・技芸などの最も奥深いところ。陶冶…人の性質や能力を円満に育て上げること。涵養…ゆっくりと養い育てること。

第六条

私立大学ハ財団法人タルコトヲ要ス(後略)

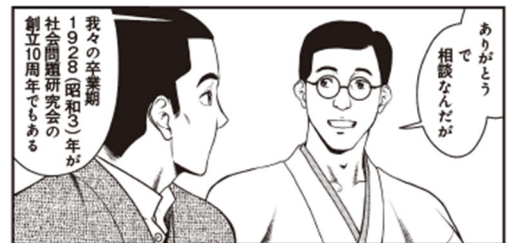
第七条

前条ノ財団法人ハ大学ニ必要ナル設備又ハ之ニ要スル資金
及少クトモ大学ヲ維持スルニ足ルヘキ収入ヲ生スル基本財
産ヲ有スルコトヲ要ス

大学令においては、大学の目的(第一条)のほかに、私立大学については、法人格を有し(第六条)、設備と基本財産を有することが義務化されていた(第七条)。

のちに立正学園評議員となる阪本泰護の回顧によれば、馬田と小野との邂逅については、次のように記されている(漫画本編三四ページ)。

私が立正大学社会学科三年生の時、社会問題研究会の総務になったが、昭和三年がその創立十周年に当たり、私共が卒業期なので何か記念行事をしたいと考えた。会長は馬田先生であった。私共は種々協議し、考えた結果、教育事業（特に女子）と社会事業をすることになり、馬田先生に報告し相談した所、私共の心と熱意が受け入れられ、大いにやるよう励まされた（前掲『小野光洋先生 私学人としての足跡』七七ページ）



職種の増加、教育機会の均等をめざして、女子教育に着手したと考えられる。こうした視点は馬田・小野の先見性の賜物と考えられる。このとき馬田は教授、小野は学生であり、立場の違いを越えて、女子の職業教育の実現に邁進していくのである（漫画本編三三ページ）。

第二章は、小野光洋の生い立ちから日蓮宗大学への入学までの経緯のほか、馬田と小野が社会問題研究会において邂逅し、いよいよ女子教育に向けて動き出すシーンが描かれていました。次の第三章では、一連の活動の結果として一九二七（昭和二）年に立正幼稚園、立正裁縫女学校が開設される物語の佳境が描かれています。

阪本と小野が初めて出会ったのは、一九二七（昭和二）年五月のことであった。ともに立正大学に在籍していたが、これまでに面識はなかったという。阪本は、社会問題研究会の総務の役職にあり、卒業年である一九二八（昭和三）年は、社会問題研究会の創立一〇周年に当たることから、記念事業の実施を馬田に相談し、賛同を得たのである。社会問題研究会が女子教育に着目した背景には、大正デモクラシーが深く関係していた。大正時代という民主的な風潮のもとで、女性の自立、解放などの機運が高まり、都市部においては、工業化の進展とともに、新たな職業が誕生し、女性の就労機会が増えていったのである。事務員、店員、タイピスト、美容師、バス車掌などの職業婦人が誕生している。



このように、社会問題研究会は、女性の社会進出の拡大、女性特有の